



正宗白鳥全集

第十五卷

十五

福武書店



正宗白鳥全集第十五卷

一九八六年二月二十一日 印刷

一九八六年二月二十八日 發行

著者 正宗白鳥

發行者 福武哲彦

發行所 株式會社 福武書店

東京都千代田區九段南一丁目二八

〒102 電話 (03) 330-2233

振替口座 (東京) 六〇五五七

印刷・製本 大日本印刷株式會社

定價 六五〇〇圓

第二十六回配本 (全三十卷)

(落丁・亂丁本はお取り換え致します)

正宗白鳥全集

第十五卷

裝	編	監
丁	集	修
山	紅	井
高	野	伏
登	敏	鱒
	郎	二

第十五卷

小說十五

目次

日本脱出

九

人間嫌ひ

三二

歌舞伎の夢

三六

O氏とその周囲

三七

一しづくの涙

三六

死の勝利

四一

地上樂園

四六

一種のニヒリスト

四三

銀座風景

四三

アドルム

四七

解題

中島河太郎

四九

小
說
十五

日本脱出

一

場所は輕井澤としてもいい。那須野ヶ原としてもいい。或ひは山中湖畔としても差支へはないのである。時は戦時中の或る夏のことである。數人の男女が世を忘れて世を樂まうと企てたことがあつた。

世を忘れると云つても今日の時勢である。今日の人間である。彼等の夢見る力は高が知れてゐる。遠い昔の風流人の浮世忘れのいとなみに比べるとチャチなものかも知れない。「時々集つてお茶でも飲んで無駄話をしようぢやあり

ませんか。めい／＼に何かうまい物を持參して、何處かで晚餐會を開いて、たら腹食慾の満足を経験しようぢやありませんか。」と、千隈秀夫がふとした思ひ付きで氣輕に、戸倉文藏に話したことからはじまつて、會の内容が次第に濃厚になつたのであつた。來會者は三四人から五六人になり、十人近くにもなつたが、十人は超過しないことに決定した。はじめは地上樂園のつもりで、お互ひの客間でおとなしく食事して、靜かに世間話をしてゐるに過ぎなかつたが、それでもあたりの人の目につくやうな氣がしたのみならず、警察人から、多人數の集會が何かの意味があるらしく疑はれはしないかと氣遣はれた。それで、千隈の勇敢奔放な思ひ付きで、自分の地下室を會場に提供することにした。彼は早くから時世の動きに目をつけてゐて、自分の別荘に堅牢な地下室を造つてゐた。そこには、さまざまの食糧品を蓄積し、衣料や家庭用具をもそなへてゐた。數人の家族がのび／＼とそこに起臥し得られるやうにも用意してゐた。週末に來ては自分で樂みにさういふ設備をしてゐて、人には洩らさないでゐたのであつたが、つひに思ひ切つて、會友をそこへ誘ふことにした。地下の樂園をそこに創造して、會友一同で、浮世忘れの樂みを樂まうとしたのであつた。大聲叱呼しても、騒々しいジャズが鳴つて

も、音響は些しもとへ出ないのである。電燈の取り付けを憚つて、惜し氣もなく百目蠟燭を點けて、薄明るい優雅な光に、古代の風致がおのづからそこに漂ふやうにした。

千隈は工學科出身で、鑛鐵業を經營して、今はプレス工場的主任で巖のやうな顔面は、半白の縮れつ毛を頂いてゐたが、氣持は青年のやうに若くつて、時々馬鹿遊びにも熱狂するのであつて、彼に接する者は、誰も氣が置けないで歡笑されるのであつた。この別荘には、蓄音器もあり、娘のためのピアノも備へつけられてあつたが、彼の趣味から、三味線も尺八も置かれてゐた。彼自身、下手ながらも尺八も吹いて獨りで興がることもあるのであつた。

或る年の土用も半ばを過ぎた眞夏の或る日、こゝで地下室第一回の集まりが催された。最初からの定連のうち二三人の死者病者があり、六人の出席。官界の失業者戸倉文藏、建築技師川島玄道の二人は千隈とともに初老の境を越えてゐるが、三十未滿の跛の田舎青年の鹽澤信治と、少しくらゐピアノの弾ける若い松野夫人と、ダンサーの岸野邊よね子が加つて會場を色取つてゐる。それに、今夜はじめて、千隈の選抜で、工場に於ける彼の部下の青年草刈鎌三がこの集まりに引き入れられた。松野夫人は夫君が出征してゐて、近年は夏のうちは殆んど獨りでこゝの別荘で暮し

てゐたのであつた。ダンサー岸野邊はニューヨークでダンスの教師として、在米の日本人に斯道の教へを垂れてゐたのだが、職業の榮える當てはないし、同棲者の浮浪漢とも、生活の不自由のための喧嘩騒ぎが續くの恋愛が盡きたので、思ひ切つて獨りで歸國することになつたのだ。日本にもダンスがはやりかけてゐると、漫遊客に聞かされたので、それによつて一人口くらゐ過せるだらうと豫期してゐたのであつたが、歸つて來て實情を見ると、小さな望みもかなひさうでなかつた。歸朝後間もなく日華事變が起つて、はれ／＼しくダンスなんかやつてゐられないやうな有様となつた。漫遊中に知り合ひになつて、二三度氣まぐれなダンスの手ほどきをして貰つた千隈は、このダンサーに訪問されて事情を聞かされると、可愛想になつて、自分はダンスなんか何の興味もないのに關らず、生活の援助をすることにした。いつか浮ぶ瀬もあるだらうと力をつけてやつてゐた。

千隈は開會の辭を述べた。「今日は白峰さん豊原さんが止むを得ぬお差支へがあつて御來會なさらないのが残念であります。しかし、そのかはり、前回に私から特別に推薦して、皆様の御同意を得ました草刈鎌三君が御出席下さつたことを、皆様に喜んで頂きたい。回を重ねるうちに皆様

にもお分りになることと察せられますが、草刈君は頭腦のすぐれた有爲な青年でありまして、私どもの一夕の歡興がこの青年によつて一層の光彩を添へるものと存じます。さて、この地下室の會合は、殊更奇を好むやうではありませんが、今日の御時勢では止むを得ないことと思はれないではありません。時世を反映してゐるやうでもあります。地下室の會合と云つても、我々は地下にもぐつて陰謀をたくらむではありません。我々ほど陰謀に縁の遠い者はない筈です。無邪氣至極で、明朗そのものであると、自畫自讀してもよろしい。どうぞ、皆さんこゝにいらつしやる間は、今の浮世をお忘れになつて、心ゆくまで楽しく語り、楽しく遊んで頂きたい。これを開會の辭といたしますが、會の趣旨に似合わない堅くるしいことを申し上げて相済みません。」

一同は儀禮的に拍手した。食卓は二つ並べて、卓上には一皿盛りだが、可成り質のいい料理が含まれてゐた。艶のいいハムやサラダや、ゆで鰯がたつぷり盛り上げられてゐた。色の白いパンが添へられてゐた。ライン産の銘のある祕藏の白葡萄酒によつて、先づ祝杯が舉げられた。北京製の厚ぼつたい絨毯が敷かれてあつて、壁には三つばかり油繪が掲げられてあつて、料理と云ひ、酒と云ひ、西洋色が

濃厚である筈だが、參會者の顔色や態度が、傍觀者があつたら、その目には和氣紛々たる思ひをさせられるのであつた。新來者の草刈鎌三の目にはさう映つてゐた。

「君は今、この會は明朗そのものだと言つたが、僕はその點で疑問を持つてゐるよ。今日の缺席者を惡く云ふのはよくないだらうが、白峰なんか明朗でないね。彼奴の身體にも心にもいつも雲がかゝつてゐるやうで、酒の利き目でもあると、えたいの分らぬことを喋舌りだすぢやないか、戰爭になつてからあんなふうになつたのだらうが、あれも一種の戰爭病に罹つたんだらうね。」戸倉は千隈に向つて云つた。

「さう云へばお前だつてさうだ。こゝに御座る連中は誰だつて戰爭病に罹つてゐるんだよ。こんな會の出來たのも戰爭病に罹つた結果なんだ。おれも昔のおれぢやない。諸君もさうだ。松野の奥さんもさうだ。この地下室を出りや、直ぐさまフロツクコートなんか着用して、偽造の浮世の義務を盡すのだが、こゝへ入ると、人さまの假面を脱いで、本然の我に返るんだ。明朗たる所以ぢやないか。白峰の身體に雲がかゝつてゐて、譯の分らぬ面白いことを喋舌るのに、お前は難癖つけてるが、譯の分つたやうな四角四面の一億一心面（いちおくしちめん）をしてることこそ、嘘の骨頂なので、雲が

かゝつたり譯が分らなかつたりするところに、人間それぞれ
の面目が出て、甚だ明朗であるのだよ。」

「半分づつおれはお二人に同感だ。新人者の草刈君にはまだ
お分りにならんでせうがね。」と、川島は差し出口を利
いた。汚れた口をナブキンで拭いて、「孔子様の云つた不
惑の歳を過ぎた分別盛りの我々が、無邪氣にたはけた口で
も利き合つて、たはけた眞似でもし合つて遊ばうと思ふの
は惜春の感を起したためですよ。自分の春を惜しむのぢや
ない。日本の春を惜しむんです。」

「さうして感傷的になるんだね。此間の君の涙ぐんだ思ひ
出話には一同身につまされて、あたりがしめやかになつた
ものだ。」千隈は冷笑的に云つた。

この席上での最年少者の草刈は、會の性質がどんなもの
であらうとも、先づうまい食物にありつけたのが樂しかつ
た。かねて心に描いてゐた美食を満喫した快さに陶醉し
て、精神力も一層活躍しさうであつた。飲み馴れない美酒
の一杯は、血汐のなかに注がれて、自分の美しい肉體が一
層美しくされるやうであつた。學生時代の乏しい粗食、こ
の頃の工場での惡食のために、天與の肉體の傷つけられる
のを無念に思つてゐた彼は、青年らしいさまじい夢のう
ちに、營養價値の多い食物、殊に西洋風の食餌の攝取をつ

ねに夢見てゐたのであつた。西洋映畫を見るたびに、そこ
に映し出される贅澤な食卓の光景にいつも涎の出る思ひを
さゝれてゐたのであつた。

軍部や官僚の横暴な所行に對する不滿の聲が、誰かの口
から洩れ出することはあつたが、この會の規約として、さう
いふありふれた話は取り合はないこと、もみ消すことにして
ゐるのであつた。それに、千隈や戸倉などこの會の創立者
は、俗界の事業は世の趨勢と歩調を合せて經營しようとする
常識は所有してゐたが、世の慣はしを外にした我儘をし
たい慾望は強くつて、浮世を忘れて、この會に没頭して鬱
憤を晴らさうとする心意氣は持つてゐた。

「蠟燭の光はよ御座んすわね。夢心地がしますわ。晝をあ
ざむく電燈の光で皮膚の毛穴まで見られるよりは、人間の
顔も少しはお上品になつていゝんですわ。お話もしんみり
承れますわ。」

松野夫人は、睫毛の長いうつりした目で人々の顔を見
廻した。草刈はその目で見られた時、我にもなくまぶしい
思ひをして、思はず目を伏せたが、これも蠟燭の光のせゐ
か、夫人のほんのり酒に染んだ頬べたが、浮世繪の美人顔
のやうに映じたのであつた。

「ハ、ハ、ハ。」千隈は快笑を發して「しんみりした話なんか、

これまでこの會には無かつたことです。一つあなたから、そのしんみりしたお話を拜聴しませうか。戦争が生みだしたためそ／＼した話は、飽きるほど聞かされてゐるんだが、しんみりした話は聞かされたことないね。この頃はこの地方の盆の季節だ。蠟燭の火もへらして、精霊を招いて、しんみりしたあの世の話でも聞かせて貰つたら、地下室會議第一回の餘興になるだらうが、この會には精霊くだしの術を心得てる者は無いやうだからそれも駄目か。」

「精霊でも何でも死んだ奴は御免だ。」今度は川島が口を出した。「おれはこの穴藏からは音聲が洩れないのを幸ひ、一つ思ひ切つて、肺臓の破れるやうな大きな聲を出して見たいんだ。諸君は鼓膜の破れるのが心配なら、その時は耳をふさいで置くんだね。しかし、おれの銅鑼聲は、閉會の時に出すのだから、今から御心配なさらなくてもよろしう。」

一皿盛りの料理をたべ終つた頃、川島は、自轉車で持つて來てゐた箆の中から、鮭を詰めた重箱を三つ四つ取り出して、食卓に置いた。これは主人役の千隈と打ち合せてゐたのであつたが、その外に二つの假面が持ち出された。高砂の尉と姥といつたやうな面持の、二老人の木彫で、川島自身の覺束ない手すきみであつた。「この會のシンボルに

壁へでも掛けちやどうかと思つて持つて來たんだよ。」

「いゝかも知れないね。諸君いかゞです。お互ひに尉と姥の氣持になれますか。この前でしんみりした昔話でもしよう」と云ふでね。」

「それはいゝ思ひつきね。二人とも秀逸な顔してますわ。早速お掛けになつたらどう？」

鹽澤は正面の棚の上にそれを安置した。「この前で高砂の謡曲を眞似事にでも謡へる人は、このなかにないんですね。」

「ないのが仕合せさ。素人の謡曲を聞かされちやたまらないからね。この會の方々は、どなたも一藝は持つていらつしやるやうだが、隠し藝といふものは、いつまでも隠していらつしやればよろしい。浮世の會で餘興にやる隠し藝なるものは甚だ詰まらないもので、それを見せられたり聞かされたりしてお義理に拍手喝采を送らなきゃならんとすると甚だなさないよ。この會では今まで隠し藝なるものはおのづから封鎖されてゐたが、規約として封鎖してもいいね。」

「そいつは少し行き過ぎだ。おれは今夜は、隠し藝を持ち出して、諸君をアツと驚嘆させるつもりだつたが、それも見合せなければならぬかな。少し残念だよ。」

「それは、おやりになつたらいかゞ。アツと驚嘆させられること、あたしどもの望むところぢやありませんか。」

「いや、規約を破つてまでやるべきものぢやありませんな。」

草刈は、地下室の會食、祕密の集會と云ふから、何か變つたことでもあるかと、はじめは、會員の言語行動に注意してゐたのであつたが、地上の普通の會合に比べて、別段異つたところは見つからなかつた。それでも、今の時世にこんな仲間に加はされてゐるのは有難かつた。彼は、鹽澤を助けて、食卓の整理をして、地上の臺所から鮎を食べるための小皿や醬油や番茶などを持つて來て、遠い昔に食べたことのあるやうなこの美食のお相伴にあづかる光榮を喜んだ。

「この前はうまい物の話が盛んだつたね。やたらにうまい物の名前が出た。まづい物ばかり食べさせられてゐる今の時世では、誰にも興味があると見えて、話が榮えたのだが、今回は誰か皆んなの心を惹くやうな話題を提供するものはないだらうか。お蔭で今の御時世には珍しい口腹の慾は満たして、この樂園に感謝しますが、それだけでは少し物足りない筈だ。」

「云ふまでもなく、會長には何かの名案があるだらう。蠟

燭の光のせみばかりぢやない。地下室に集つてゐるといふことが、何だか神祕不可思議な感じがするぢやないか。我輩さつきからそんなふうに感じられてゐるんだよ。天上を駆け廻るのは雄大で爽快で、飛行機の乗客か、天の使見たいだが、地下に潜るのは、惡魔趣味の所がありさうだよ。」

「惡魔趣味結構だ。」これは千限が傲然として斷言した。

「地下で、世を忍んで、蠟燭の光で同好者が宴會を開いたことくらゐで、少しは浮世忘れの夢心地になれるのは結構だ。皆さん、夢心地におんなさいよ。地上の人々は、それ〴〵に御苦勞な思ひをしてゐなざる。我々は、たゞの一晚、二時間か三時間かの間でも、浮世忘れの夢心地にならうぢやありませんか。酒ならさつきの葡萄酒でも、スコツトランドのウキスキーでも、ミュンヘンのビールでも、蓬萊の仙人の造つた長命酒でも、お好み次第で提供しますよ。音楽もお好みのレコードを掛けてよろしい。僕にはよく解らないが、ヴェートーヴエンでもショパンでも演奏させなさいよ。日本物でも僕などには結構だ。延壽太夫の清元でも、小三郎の長唄でも、或ひは勝太郎の歌謡曲でもよろしい。……おい、鹽澤、そのカーテンの隅の穴にしまつてある筈の何かの酒を二三本持つて來てくれ、長命酒だつて、酒中の酢豆腐と云つたやうな乙な味のあるものだよ。」